

逃げなくてよかった

群馬県立中央中等教育学校

三年 宮川 日菜

逃げればよかったのに。中途半端な結果に終わって、悔しがっている人を見ると、そう思ってしまう。どんなに努力しても、失敗をしたら絶対に後悔する。完璧にできる自信がないのなら、最初から他の人に任せればいい。そうすれば、恥をかくことも、自らの未熟さに気付くこともなかったのに。

私も同じだ。間違えることが怖くて、できない自分を隠したくて、いつも無難な選択ばかりをしてきた。それでも、心のどこかでは分かっていた。失敗しない代わりに、発見もない。恥をかかない代わりに、成長もない。そしてそんな生き方が、私を少しずつ小さくしていることを。頭ではそう分かっているのに、いつも変われなかった。手に入れられるか分からない成功

のために、失敗するリスクをとる必要なんてない。そう言い聞かせながら、私はまた「挑戦しない理由」を探していた。間違いなくあの日までは。

それは駅のホームでの出来事。私は友達と一緒に電車に乘ろうとしていた。突然後ろから、ものすごい速さの英語が飛んできて、振り返るとそこには、私に何かを尋ねかけてくる外国人がいた。どうして私に？急に話しかけられた驚きと、その速さに圧倒された私は、「パーデウン？」と何度も聞き返すばかり。そのうち、彼が「新宿駅についた後の乗り継ぎの仕方を教えてほしい」と言っていることが分かり、悪戦苦闘の末、やつとのことでその方法を伝えることができた。しかしその中身は、日本語か英語か分からないような文章、ぐちゃぐちゃの文法、カタカナ発音のスピーキングなど、思い出すだけで顔から火が出そうなほど恥ずかしなものだった。こんなことなら、初めからスマートフォンの翻訳機能を使えばよかったのだと、とても後悔し、恥ずかしくなった。正確に伝わったかどうか分からない。周りにはたくさんの人がいて、なんだか自

分が白い目で見られているような気がして、今すぐにも逃げ出したかった。そんな時、彼は突然言った。

「Thank you so much」

満面の笑みで、私の手を握りながら、彼はそう言ったのだ。正解ではなかったはずなのに。むしろ自分では不正解だと思っていたのに。それでも、目の前の人は笑顔で感謝してくれた。私はずっと、「正解を出せること」に価値があると思っていた。間違えないこと。

完璧であること。それこそが「正しい」のだと。しかし、本当にそれだけが価値のあることだったのだろうか。目先の結果や周りからの評価にとらわれ過ぎて、本当に大切なものに気が付けなかった。私に必要なだったのは、正しい文法でも、きれいな発音でもない。今日の目の前の人に「伝えようとする事」。ただそれだけだった。

私たちが生きているこの社会は、今、凄まじい速さで進化している。スマホを開けば、数秒でAIが最短ルートを提示し、意識していないのに自分好みの動画が勝手に流れ、完璧なレポートを代筆する。便利で、

正確で、効率的。しかし、全てが自動化、最適化された中で、私たちはただ、提示された選択肢を選ぶだけの存在に成り下がってはいないか。想像してみてもいい。もしもあの時、私が無機質な画面を差し出すだけで終わっていたら。そこには、相手の目を見て言葉を絞り出す必死さも、ようやく伝わったというあの達成感も、自分自身の殻を破ったあの瞬間も、何一つ存在しなかったはずだ。

逃げればよかったのに。中途半端な結果に終わって、悔しがっている人を見ると、そう思ってしまう自分がいた。けれど、今は違う。あの時私は、「正解」ではなく、「自分の選択をする」ということの大切さを知った。誰かが用意した百点なんて要らない。たとえ一点でも、自分の力でつかみ取ったものにこそ、価値があるからだ。間違えることを恐れ、無難な選択をして立ち止まっているよりも、自分が進みたい道を歩み続けたい。たとえそれが完璧でなくとも、間違いだとしても。あの時の数分間が、それでいい、そう私に教えてくれたから。